

島根の地域医療

第73号

2020/10/16

SHIMANE
AKAHIGE
BANK



発行者 島根県健康福祉部
医療政策課医師確保対策室

今回の紙面

- ◆地域医療最前線 NO.78 「地域医療の再構築」《大田市病院事業管理者 西尾 祐二》
- ◆専攻医のページ 「高齢化の進む町・津和野での訪問診療」《津和野共存病院専攻医 鬼山 佳祐》
- ◆看護師さんのページ NO.56 「島の医療はともに生きること」
《海士町国民健康保険海士診療所看護師長 澤井 千波》
- ◆臨床検査技師さんのページ 「医療現場における『検査の匠』」
《国立病院機構浜田医療センター 副臨床検査技師長 中藤 太一》
- ◆事務長さんのページ 「『総合』をキーワードに〜小さなまちの魅力〜」《飯南町立飯南病院事務長 高橋 克裕》
- ◆編集後記



地域医療 最前線

No.78

地域医療の再構築

大田市病院事業管理者 西尾 祐二



今年大田
市立病院
は新病院
をオープン
しました。
339床か
229床へ
大幅にサ

イズダウン、急性期+回復期医療を担う病院として再スタートしました。大田二次医療圏の人口は、1999年の旧大田市立病院発足時には7万人を超えていましたが、現在は5万人をわずかに超える程度です。この20年で人口は2万人減少、診療所は半減しました。圏域の医師不足は慢性化していますが、当院ではここにきて徐々に医師数が増え、現在ではほぼピーク時の数字に戻っています。長年の懸案であった整形外科医も着任し、所要なすべての診療科で常勤化も実現しました。研修医も増え、現在常勤医不在の診療科からあらたに常勤医派遣のオフアールも届くようになり、病院の魅力がアップしたと感じています。誠にうれしい限りであり、ご尽力いただいたすべての皆さんに感謝申し上げます。しか



大田市立病院

し、いざ新病院がスタートしてみると、集患力や収益性が高まると期待していましたが、現在のところ、コロナの影響もあるとはいえ、病床の利用率は上がらず、収益も昨年並みと赤字基調を抜け出ていません。平成13・14年では医師数がほぼ同じであった当時は、病院は経常黒字を出し、月当たりの報酬額も今より多かったです。圏域人口の減少に加え、病院機能分化が進む中、車で40分圏内に500床規模の病院が複数あれば、急性期医療のニーズは相対的に減少しているのかもしれない。しばらくは、コロナの影響も考慮しつつ、地元に着着した病院として、対応可能な医療をしっかりと実践していくことで再び地域の信頼を高めていきたいと考えています。

受療患者のほぼ8割を65歳以上が占めています。今やどこでも珍しいことではありませんが、入院患者の平均年齢も年々上がっているように感じています。高齢者の多くは複数の疾患を有し、疾病構造はより複雑化しています。全科において専門医を確保できない地域の病



玄関



ロビー

院では、総合診療医のニーズは高くなっています。また、専門医においても、総合的診療対応力がなければ専門医療の遂行が困難になってきています。地域で働く専門医には、高度医療を担う病院の専門医とは違うハードさがあると感じています。専門領域の他に総合診療能力を具備するか、総合医のサポートが受けられる体制が必要となると思います。病院総合医は地域医療遂行のキープレイヤーであり、益々重要度が増すことは間違いありません。養成が急がれるところです。

圏域から診療所が大きく減少しています。これは後継者の問題や医師の都市集中もさることながら、民業としての地域医療が成り立たなくなっている状況を反映しています。民業が撤退した後、残された住民に、だれがどのように医療を提供していくのか選択肢は多くありません。何らかの政策的な医療対策なくして問題解決は困難に見えます。コロナ禍の中、リモート診療やAI活用による遠隔診療の診療手法も普及しつつあり、当地でも活用を模索していき

たいと考えていますが、一方で高齢者、認知症患者も多く抱えるこの地域で、どの程度の住民がその恩恵に与れるかは疑問です。また、それによる診察ですべてをカバーすることは出来ず、診察や検査も含め診療を提供するには限界があります。大田市立病院は、本年度から診療所への出張診療も開始予定です。大田総合医育成センターの後期研修プログラムも動かしつつ、家庭医育成と地域医療確保を狙うものですが、大田市のサポートも頂きながら、大田市と共に住民の生活、生命を守る取り組みとして、自治体病院の使命として取り組んでいくことにしています。

以上とりとめもなく、地域医療についてのべてみました。これからの地域医療について明確な答えは見つけられてはいませんが、一つだけ言えることは、過去の成功例は参考にならないということです。未来を見つめ、医療経済もしっかりと担保しながら医療体制を再構築することが必要です。自治体病院の役割は更に、複雑多様化していきます。覚悟を持って臨まなければならぬと考えています。

専攻医のページ

高齢化の進む町・津和野での訪問診療

津和野共存病院専攻医

鬼山 佳祐

令和2年4月に津和野共存病院内

科に赴任いたしました内科専攻医の鬼山と申します。この度は「島根の地域医療」への寄稿の機会を与えて頂き、関係各位に御礼申し上げます。

私は平成29年3月に島根大学医学部医学科を卒業後、令和2年3月まで福岡県の病院で研鑽を積み、この度縁あって津和野共存病院へ赴任することとなりました。学生実習で二度津和野町を訪れたことがあり、病院の雰囲気の良さはもちろんのこと、「山陰の小京都」と呼ばれるように、かつての城下町の佇まいをそのまま残した美しい町並みに感激し、いつか勤務できたらと心待ちにしておりました。新型コロナウイルス感染症の影響で、思い描いていた新生活のスタートとはなりませんでしたが、地域の皆様のお役に立てるよう日々の診療に励んでおります。

津和野町は、島根県の西端に位置し、県庁所在地の松江市より約200km離れた場所にあります。人口は約



診察風景

7,000人で、高齢化率が約49%、我が国の高齢化率(28.4%(2019年9月15日時点))と比較しますと、津和野町の高齢化率がいかに高いかがわかります。日本の将来推計人口(平成29年推計)では、2065年の日本の高齢化率は38.4%であり、45年後よりさらに先の日本社会のモデルケースが今の津和野町だと思っております。

前置きが長くなりましたが、私が津和野共存病院に赴任して、早4ヶ月が経とうとしております。様々な経験をさせて頂いておりますが、特に楽しく、またやりがいのある仕事は訪問診療です。病院に通う交通手段がない方や独居の方、自宅での療養を希望されている寝たきりの方など、病院に定期受診することが難しい患者さんのご自宅を訪問し、元気に過ごして頂けるように健康管理を行っております。治療中の疾患はもちろんのこと、家庭状況なども多種多様であるため、その方らしい生活を送って頂けるように支えていく必要があります。身体診察で異常がないかを確認するだけでなく、自宅の住環境が患者さんにとって快適かどうかまでも確認しています。例えば今の季節であれば、熱中症の発症リスクが高いため、エアコンや扇風機などの冷房機器に関して適切な使用方法を指導したり、室温設定まで行ったりすることもあります。日常生活を観察することで、予測されるリスクを事前に把握できるため、疾患の発症を防ぐことが可能です。以上の

理由より、私は訪問診療に対して非常にやりがいを感じますし、毎月患者さんの元気な姿や笑顔を見られることが何よりの楽しみです。

最後になりますが、これから津和野町の地域の方の力になれるように日々努力し、ここでしか学ぶことができない大切なことをしっかりと学んでいきたいと思っております。

看護師さんのページ

No.56

島の医療はともに生きると

海士町国民健康保険海士診療所

看護師長 澤井 千波

私たちの勤務する海士診療所は隠岐諸島で3番目に大きな島「中ノ島」にあります。実際には小さな島であり、島全体が海士町、人口は約2,200人です。本土への交通手段は主としてフェリーで、3時間半かかります。入院施設はなく、入院の必要なケースなどは船舶またはヘリコプターでの搬送になります。

そんな島唯一の診療所ですが、血液検査、心電図、レントゲン、超音波装置、胃内視鏡のほかCTを整備し、内科の全般的な医療を行っています。近年では本土の医療機関の協力により、眼科、整形外科、精神科の専門外来が定期的に開設されています。

診療所では、医師2名、看護師8名、作業療法士、理学療法士、言語聴覚士各1名のほか、事務職6名体制で一丸となって診療に取り組んでいます。



スタッフの皆さん

また、「ともに生きる」「みんなで一緒に見る」「患者様とその家族に寄り添い可能な限り望みを叶える」という精神のもと、在宅医療、緩和ケアにも取り組んでいます。

他施設からの多職種を加えた在宅緩和ケアチームを編成し、個々のケースに合ったプランニングを行っています。そのうえで「望む最期」が迎えられる努力をしています。

多岐にわたる疾患に対しての看護は貴重な経験である反面、多くの知識を必要としますので、常勤医師の協力や、看護師自らが講師となり定期的に院内研修会を開催し、学んでいます。ときには他施設の職員にも参加を求め、知識を深めるための学ぶ機会を提供しています。島外の研修会には移動時間や職員不足の関係から、参加が出来ないこともありましたが、参加した場合は院内で講師となり研修会を開催し、参加できなかった看護師の学びにつなげています。

診療所は唯一の医療機関であるため、予防医療としての保健活動との関わりもあります。保健師とともに、住民の健康維持が目的である糖尿病健診の機会が年1回あります。この事業は糖尿病専門医、神経内科医、眼科医の診察や、管理栄養士による栄養・生活指導が個別に行われます。

このように、日々患者様の生活と深い関わりを持ちながらの看護活動であるため、在宅や施設、通所サービス利用時の他職種との情報共有が不可欠となります。そのため、電話やFAXでの情報交換に留まらず、ネット回線を用いてのタイムリーな情報の共有を行っています。

小さな地域、小さな診療所だからこそ成し得ることを最大限活かした看護を行っています。「ないものはない」、これが私たち海士町のスローガンであり、この精神を医療の面でも活かし、島の住民として一緒に生活を送り、笑顔を忘れず看護を提供していきたいと考えています。

臨床検査技師さんのページ

医療現場における「検査の匠」

国立病院機構 浜田医療センター

副臨床検査技師長 中藤 太一

国内での新型コロナウイルス（COVID-19）感染は拡大し、「重大局面」を迎えつつも未だ収束の見通しすら立たず、医療現場の危機的な

状況が盛んに報道されています。安倍晋三首相が「全国各地の医師、看護師、看護助手、病院スタッフ、クラストの追跡調査等に携わる専門家や保健所職員、臨床検査技師の皆さんに、日本国民を代表して、心より感謝申し上げます」と謝意表明されたのも記憶に新しいのではないのでしょうか。

臨床検査技師は、医師や看護師、他の医療技術職に比べると一般の認識も低く患者様と直接かかわる機会も少ない職種ですが、医師の指示のもとに、検体検査と生体検査（生理機能検査）を行う、検査のスペシャリストです。新型コロナウイルスの影響で、一気に注目を浴びたPCR（Polymerase Chain Reaction）、この検査は鼻や咽頭の細胞や唾液を採取して、微量の病原体を高感度で検出することができるとの手法のことです。コロナウイルス等のウイルスは、細菌に比べ非常に小さくそのままでは扱いづらい為、遺伝子を増幅させて検出する機器を用いて検査を行います。PCR検査については、医師が必要と認めた場合には確実に実施されることが重要であり、検査件数増加の為、更なる検査体制の整備が急務となっていることから、臨床検査技師の需要は急激に高まっています。医療の進歩や分業化により、臨床検査技師が取り扱う検査対象はますます広がっています。近年では「病気の予防」「早期発見、早期治療」「再発防止の定期検査」といった予防医学や健康増進

などへの意識も根付いてきました。そうした背景から、臨床検査技師には病気の早期発見に有効な健康診断や人間ドックなど、多くの場面で更なる活躍が期待されています。

2019年は、検体検査室における精度管理体制について大きく注目されました。法の改正に伴い、医療機関が自ら検体検査を行う場合には、施設の管理組織等について厚生労働省令で定める基準に適合させる必要が生じました。そこで測定標準作業書、検査機器保守管理・標準作業日誌、その他各種作業書類の改定を行いました。業務が増えたにもかかわらず、所定の時間内に仕事を終えることができるようになりました。これもスタッフのや



スタッフの皆さん

る気と、チームワークの賜だと思っています。また新たに外来採血業務が昨年6月から開始され、検査で培った知識・技術を備えたスタッフを処置室に送り出しています。検体採取から検査まで携わることにより、スタッフの意識も大きく変わりました。処置室からの問合わせ件数も大幅に減少する事が出来ました。患者様の利便性の向上に寄与するための活動を今後も継続していきたいと考えております。

私たち臨床検査技師は、医師が診断や治療方針を決定する為に、縁の下の力持ちとして必要な情報を細分化し多方面から分析・解析し提供していきます。今後も各部署における専門性を高くし、当検査科の目標でもある「迅速且つ高い精度で正確に」を達成できるよう、一層研鑽に努めてまいります。

事務長さんのページ

「総合」をキーワードに 小さなまちの魅力

飯南町立飯南病院

事務長 高橋 克裕

「つながり」「こども」「しごと」「定住」の4つをテーマとしてまちづくりに取り組む飯南町。飯南病院はその飯南町が開設、運営する公立病院です。人口4,800人、高齢化率44%、病床数は一般病床48床、文字通り小さなまちの小さな病院で、常勤医師

は総合医5名・歯科医師1名です。

医療はまちづくりを充実させるための重要な要素の一つとして位置付けられており、飯南病院は、中山間地域、不採算地域におけるこのまちで、直接的な医療サービスの提供はもろろんですが、医療機関としての存在や地域医療に対する責務を積極的に発信することで、地域の皆さんが安心して働き、暮らしていけるまちづくりに関わり、魅力的な「まち」の機能の充実にも取り組んでいます。

昨年末には、町内唯一の開業医院が閉院され、医科の医療機関は、飯南病院と、同じく町が開設する3ヶ所の診療所のみとなり、その役割が一層大きくなっています。

3カ所の診療所には医師を含めて職員は常駐せず、診療は病院から派遣された医師と医療従事者等による「飯南版ブロック制」ともいえる仕組みで行われています。4つの医療機関は一体的に管理され、効率的な運営がなされています。

この小さな病院で、住民が求める充実した医療サービスを提供できるよう掲げているのが「総合」というキーワードです。医師を中心とした多職種のスタッフが事務職員も含めて特定の分野のみならず、幅広い役割を共有して取り組んでいく「総合マインド」を常に意識し業務にあたっています。今後「総合マインド」は行政全体、まち全体に浸透していくことを期待しています。

カルテを開かなくても名前がわかるほどの小さなまちにおいて、総合

力によって高められた機動力は、そのまま医療サービス、住民サービスに直結します。毎月2回、病院医局を会場に行われる地域ケア会議では、多施設、多職種が集まり、ケースごとに時間をかけて情報交換され、すぐさま診療や療養に活かされています。昨年末に開業医院の閉院が決まった地域で行なわれた医療座談会では、「病院の先生方に負担は掛けられない。自分たちが飯南病院へ通う」と診療所の新設は求められませんでしたが、町もその声に応え、閉院とともに町営バスのダイヤを変更し対応しました。このような一体感とスピィディーな展開は、まさに小さなまち、小さな組織の醍醐味ではないでしょうか。

飯南病院を訪れたことのない方からは、「山奥で行くのが大変そう」といったような声も聞かれますが、車で松江市から約60分、出雲市から約50分、広島県三次市から約50分の位置にあり、意外と短時間で来る事ができます。約100名いる職員のうち、10名程度が松江市、出雲市などから通っており、渋滞のない通勤時間は、プライベートと仕事との丁度良いデッドセクションとなっています。病院に研修や実習で訪れる方にも訪問診療や訪問看護以外にも、森林セラピーやしめ縄づくり体験など、積極的に地域を感じてもらえるプログラムも組んでいます。小さなまちの魅力を存分に体験したい方は、ぜひご一報ください。まちのみんなが心よりお待ちしております。



研修医、医学生の
地域体験
(自動運転サービス
実証実験)
筆者は最後列



医局での地域ケア会議

編集後記

『島根の地域医療』第73号をご覧いただきありがとうございました。また、お忙しい中にもかかわらず執筆いただいた皆様、ありがとうございました。島根県 HP では、令和2年10月1日現在の医療機関の医師募集情報を掲載しています。詳しくは、
<https://www.pref.shimane.lg.jp/medical/kenko/iryo/ishikakuhotaisaku/isi-kyujin.html>
または、「島根の医師確保対策」で検索、ご覧ください。